

## 巻頭言一

### セイ談一〇冊刊行記

夜明け前の日課になっている家敷の生垣の道路沿いを掃いて、近くの墓前に線香を立ててお経をあげているとホトトギスがけたたましくあちこちで鳴いています。五月も中旬を過ぎるとこの鳴き声が際立ち、そろそろ梅雨に入ると思うわけです。この渡り鳥は夏までこの山里で過します。最近気がつくことは燕が飛んでこないこと、雀が数少ないことです。田園が広がるこの地方は薬害のせいでは昆虫等が湧かないのです。トンボもチョウチョも我が拙宅の庭にも見かけません。

さて、この冊子も一〇年目を迎えました。決して短い年月ではありません。手作りの第一号は役場で印刷してもらった二つ折りの紙を一冊ずつ貞子がホッチキスで止めていたことを思い出します。二号あたりから役場から紹介された印刷所の小父さんが親切でだんだん内容に相応しく冊子も普通並みに見栄えがよくなっていきました。中身はそれぞれ書き手の味が正直に伝わってきました。

貞子が不慮の事故で亡くなり、私の人生は終わったと思いましたが。そして三年が経ち、新しい中西編集長を得て、その間『セイ談』は発行され、桐野会長の円満なお人柄のおかげで仲間も増え仲良く共通の味の濃い体験を重ねました。

そして今、私は長女久子の元、四国にいます。四、五日前に突然坐骨神経痛が発症し、久子が私を入来から拉致してきたと云う訳です。当地の名医二名の診察を受けました。七日にどうしても入来に帰らなければならぬので明日から又通院します。人生長生きしていれば、痛い目にも遭います。しかし、一方の北朝鮮による日本人拉致事件は、いずれ近日中にメテオメテオの終局を迎えることになるでしょう。

この号は書き手の味のある新しい未来を開く記念すべき号になることを信じています。

(四国高松市近郊にて六・三浜潮記す)